

## 五 天竜川の淵に関する伝説

これまでは『熊谷家伝記』から天竜川の淵に関係するものを取り上げてきたが、このほかにも天竜川水系の淵にかかわる伝説が数多く残っている。以下そうした伝説を取り上げてみたい。

### 〔一〕 文永寺の鐘（飯田市下久堅南原の文永寺）

① 飯田市下久堅南原の文永寺を開いた隆毫和尚さんが、天竜川の黒瀬が淵の竜神から一つの釣鐘を貰い、大変喜んで、寺へ持ち帰り叩いてみると何とも言えぬ大変良い音がする。毎朝のお勤めにカンカン叩くと叩くたびに鐘は段々大きくなり、とうとう今のような大きな鐘になった（註1）。

② 昔、文永寺の和尚が寝ていると、一人の乙女が夢枕に立って、「私は竜宮からのお使者で来ましたが、聞けばこの寺にはまだ釣鐘がないそう、一つ良いのを進めましょう。明日、まだ夜の明けぬ間に、丈夫な男を五、六人ほど連れて黒瀬が淵へ来なさい」と言った。和尚は不

思議な夢と思いながらも大変に喜んで、その夜のうちに屈強な男を狩集め、乙女に言われた通り夜の明けぬ間に黒瀬が淵へ来てみると、淵の水は闇の中で岩に砕けて物凄いい音をたてている。

和尚は岸の岩の上に立ち、数珠をさらさら通しもみながら、しばらく有難いお経を読んでいると、ややあって水の面に光がさして、青い水が左右に流れると、その間から釣鐘が一つ浮き出した。そこで和尚をはじめとする人々は、皆で引き上げたが、なかなか重くてとても五人や六人の力ではおぼつかないのをむりやりに寺まで引きずり上げてきた。今日鐘つき堂に吊してある鐘がすなわちそれである（註2）。

③ 竜宮の入口だと昔から伝えられている竜丘村ホツキの黒瀬が淵の深い水底から、「南原恋しや文永寺」と呼ぶ声が聞こえてくるという評判が立った。往來の人々が立ち止まって、じっと耳を澄ますと、確かにその通りに聞こえるというので大騒ぎになった。

村中総出で淵の中を探すと、その水底に古い釣鐘が一つ沈んでいた。早速引き上げて撞いてみたら、案の定「南原恋しや文永寺」と鳴る。そこで早速それを南原の文永寺へ納めて、鐘の願いを叶えてやったのが今ある釣

鐘である（註3）。

〔二〕 黒瀬が淵の大蛇（飯田市南原）

黒瀬が淵に天竜川の初めての橋ができたのは、建長二年（一二五〇）であるといわれている。その頃今田の吉沢藤介という人が、ある雨の降る夜、橋を渡って家に帰ろうと黒瀬が淵まで来ると、急に眠たくなったので岩の内で居眠りをして休んでいると、頭の上から、胴回りが一尺もある大蛇が頭を狙って呑みにかかった。驚いた藤介は無我夢中で家にとび帰ったが、二日ばかりおびえて遂に死んでしまった。

それから後は誰もこの大蛇を見なかったが、明治になって竜東線を作ることになり、この大きな岩を打ち壊したところ、岩の洞穴から回り一尺余もある大蛇の白骨が、頭から二メートルばかり分だけ出てきた（註4）。

〔三〕 梶借り田と文永寺の梵鐘（飯田市南原）

文永寺から少し離れた堤田（深田）は、昔は随分と深い田で天竜川の黒瀬が淵に続いているといわれた。この田は必要な時に手紙をいれると、お梶やお膳を貸してくれたという（註5）。

〔四〕 釣鐘淵（下伊那郡天竜村）

平岡村を流れる天竜川に釣鐘淵というところがある。昔ここから釣鐘が上がったので、すぐさまそれをお寺へ納めておいた。日照りが続いて、いよいよ田畑の作物が枯れるという時、村中総出の雨乞いには、この釣鐘をそのところの淵に沈めて水で洗えば、必ず雨が降るということであった（註6）。

〔五〕 かむる水神（飯田市千代）

千代村字米川（現、飯田市）の禿が淵（天竜川の支流の米川の淵）。ここは兩岸の断崖が深く迫って、樹木がうつそうと生い茂り、そのところに大きな洞窟が開いて、入口に禿水神が祭られ、昔、禿を祭ったものだとか村の人は信じている。これは村の雨乞淵で、日照りの年には若者たちが揃ってこの淵に入り、水を浴びて体を浄め、川原の広場で鉦太鼓を打ち鳴らし、大きな輪をつくって雨乞歌を歌いながら踊る。雨乞いの踊りが済んで、七日の間に雨が降れば水神様へは赤い帯を奉納し、下流の入道淵へは鏡を沈める習わしであった。

禿淵に続く梶貸淵には昔お梶を貸した話が残っている。禿水神の氏子たちは、祝儀などがあるとき入用の膳梶の数

を紙にしたため、淵の中へ沈めてやると、翌朝その品が注文通りに岸に揃えてある。用事が済めばそれをまたもとの通り淵へ返す。あるとき借りた椀を一つ損じて返さなかったために、それ以来誰が頼んでも貸してくれなくなった（註7）。

#### 〔六〕 おとんぼ淵（下伊那郡下条村）

北又地区の天竜川沿いにおとんぼ淵がある。昔、その一帯は天竜川の川原であった。天竜川の水が涸れても、その淵はいつも満水であった。ある日、漁師が魚釣りにその淵の側を通ったとき、魚が突然飛び上がり淵に飛び込んで、「おとんぼよう」といったといわれた。それからおとんぼ淵というようになったという（註8）。

——これは二章の「イ、オトボウ淵の主」の伝説と関係しよう。

#### 〔七〕 犬市淵・五郎淵（上伊那郡宮田村）

安永八年（一七七九）に書かれた『木の下蔭』によれば、宮田村太田切黒川の入口にある淵を樋淵という。この淵は名前のように細長い二〇間ばかり（約三六メートル）の淵だった。その上の淵は「さかまき」といって、深い淵だっ

た。さらに上を犬市淵という。これは昔百姓が山へのぼって帰るとき、河辺を通ったところ、思いもかけぬ浅瀬に大きな魚がいた。これを捕まえたけれども手に持つことができなかった。そこで、鰻へ蔓を通し、背負って下って来たが、後ろから「犬市さらば」と声をかける者があった。振り返って見たが人はいなかった。五、六町行って、また前のように呼んだので、振り返ったがさらに人影はなかった。また行き過ぎたところ、川瀬の深いところから後ろより間近く声高く呼ぶと、背負ってきた魚が頻りに跳ねて、ついに川の深瀬に入ってしまった。魚を得ることができなかった。このためにここを犬市と名付けた。大きな魚はアメノウオで、背負った時、尾の先が地に引きたると民俗で言い伝えている。

その上にある淵を五郎淵という。五郎という土地の者が兄弟でヒデ（明りに用いるやにのある木）を取りに行き、この淵に誤って落ちたのでこの名がある。この川はいったって山川で、山の上から木を伐り下ろす。川の両岸は岩がそばだち、水の勢いが強くて渡ることもできない。流れているうちは薪を滞りなく下ろせるけれども、この淵々に至って、薪材木とも水に巻かれて流れ出ることができない。また深淵へ人が入ることもできないので、岩の上から大木の

枝を半ば払って淵のなかへ縦にして入れ、その木にすがつており、枝に跨がって長鳶をもって、木の逆巻きを流し出す。甚だ危ないことではあるが、この山家に住む者たちにとっては、常の技だとして恐れない（註9）。

〔八〕 あめ鱒さらばよ（下伊那郡大鹿村）

明神が滝の青い滝壺の主は大きなアメマスだといわれていた。昔この滝壺で老人が投げ網を打つと、大きなアメマスが網に入った。その鱒は大きく、老人の持っているビクには入らなかった。仕方がないので、老人は魚のエラに投げ網の縄を通して、肩に背負ったが、アメマスの頭が老人の頭の上にあるにもかかわらず、尾の先が地についた。

老人はアメマスの尾を引きずりながら、塩川に沿うた峡谷の険しい小道を、大ナギの蟹沢の淵まで下りてきた。ここまで来ると背負っていたアメマスが突然、「あめ鱒、さらばよ」と、淵にむかって声を掛けた。すると淵のなかから、「諏訪の祭りにまた会おうぞ」と答える声がした。

老人はびっくりして、魚をその場に投げ捨てると、家に戻った。しかし老人はアメマスの声を聞いた瞬間から全身の身震いが止まらず、病み付いて間もなく亡くなってしまった。老人が捕らえたアメマスは明神が滝の主で、蟹沢のア

メマスとは夫婦の間柄であったといわれている（註10）。



アメノウオ

〔九〕河童の妙薬（駒ヶ根市大久保）

① 大久保の中村家は、天竜川の川奉行を勤めていた家である。この家に伝わる痛風の妙薬は、その製法を河童から教わったと伝えられている。ある日、中村新六殿が川見回りの途中、河童が馬の尻尾に飛び付いて、力一杯水中へ引き込もうとしたが、逆に厩の中に引き込まれ、飼葉桶のなかに隠れていたところを家人に捕まった。命乞いした河童は、ご恩報じに妙薬の作り方を教えたという。河童が住んでいた淵を下がり松の淵と呼ぶ（註11）。

② 上伊那郡高遠の内藤様は三万三千石、その領分内の川を預かる川奉行の中村新六殿は、中沢村の大久保に広大な屋敷を構えていた。近いところを天竜川が流れていて、その深い淵の中には河童（カワランベ）が棲み、時々通行人を水の中へ引っ張り込んで、しんの子を抜くという評判であった。この河童は全身が真っ青で、長い頭髪をばやしていた。ある日、川奉行新六殿の馬が、その淵の畔を通り掛ったところ、水中から河童が手を出して、馬の尻尾をつかみ、力一杯に水のなかへ引き込もうとした。河童は水の中にいる時は非常に力の出るものだそうである。馬はびっくりして、これも一生懸命に引っ張り込まれまいと足を踏ん張り、ここに河童と馬との力比べが



向山雅重 画

始まった。やや暫くもみ合った末、河童の方が負けて、川から外へ引き上げられてしまった。急いで手を放そうとしても、馬の尻尾をあまり固く手にぐるぐると巻きつけていたために、早速放すこともできず、もがいている間に馬はどんどん駆け出す。河童はそのままずるずると引きずられて、とうとう新六殿の屋敷の厩の中まで連れ込まれた。

そこで河童もようやく手を放し、水はないかと探してみると、ちょうど馬槽の中に水がいっぱいあったので、

早速その中へ入って隠れていた。やがて下男が馬にまぐさをやろうと厩へ来てみると、馬槽の中に河童がいる。不屈きな奴だとすぐ捕まえて、主人の前に引き出した。河童は両手を合わせて拝みながら、「命だけはお助けください。そうしたらその御礼に妙薬のこしらえ方をご伝授いたしましょう」と頼むので、新六殿も殺してみたところが無益の殺生だからと助けてやった。河童は大いに喜び、新六殿に妙薬の製法を教えてやり、自分は再び川の中に帰っていった。

それからして、その薬は家伝の妙薬として子々孫々まで伝わり、「家伝痛風薬」という名で、今も盛んに売れている。至極良く効く薬だそうであるが、河童に伝授された部屋でこしらえたのではないと、利き目がないそうである（註12）。

## 「一〇」河童の綱引き（上伊那郡辰野町）

昔伊那富村の百姓が、ある日飼い馬を天竜川の川端へ放しておいたところ、川の中から河童が手を出し、馬の手綱をつかんで水の中へ引き込もうとした。しかしなかなか馬が動かないので、河童は考えて今度は手綱を自分の胴へぐるぐると巻きつけ、力一杯に引っ張る。馬も水の中へ引か

れては大変と、これも一生懸命に踏みこらえて、ここに河童と馬との綱引きが始まった。

そのうちに馬が勝って、河童は自ら外へ引き出されてしまった。馬はそのまま家の方へ走り出す、河童は胴へ巻きつけた手綱を解くこともできず、引きずられたままとうとう百姓家の表まで来て、そこで生け捕りとなった。

河童は涙を流して、命ばかりは助けて下さいと頼むので、百姓もあわれに思い、綱を解いて川の中へ放してやった。それからして毎日、朝になるとその百姓家の前に沢山の川魚が並べてあった。これは河童が危ない命を助けてもらった御礼のために持ってきたものであった（註13）。

## 「一一」柴太兵衛河童を捕まえること（辰野町羽場）

柴太兵衛という信玄の家来になっていた者の屋敷の下を天竜川が流れ、大きな淵になっていた。六月の中旬頃、この淵で太兵衛が丈三寸の名馬を冷やしていると、馬の尻尾に何か怪しいものがついたので、馬がしきりに驚いて、馬飼いなどを踏み倒し、一目散に厩に帰った。太兵衛が折節厩に行つて馬を見ると、一四、五才くらいの者が厩から駆け出して、門前を指して飛んで行く。日が没したためにはっきりとは見えなかったが、太兵衛が自ら追い掛けて留め、

火をともしてみると、その者は猿のような格好で、頭がへこんでいて赤い毛、胴も手足も薄黒く、骨太でたくましく、爪は長く少し曲がっていた。力も強く三人力はあった。右の手を引いてみれば、左の手が右へ出る。左右ともこのようであった。

そこで獄舎に入れておいて、各の先方の侍呼び集め見せたところ、人でなくて獣である。この獣は「これは名馬なので竜宮へ引き来たれといわれたので、このようにした」と言つて、涙を流して詫びた。「命を助けてくれたならば、柴一統に仇をなすことはせず、何でも御用の魚をもつて参ります、自分はこの淵に長い間住む河童という獣である」と約束したので助けた。それから大分河童は魚を淵の端に出したということである（注14）。

### 〔一二〕 漆戸右門大蛇を殺す（辰野町）

羽場の淵から一〇町ばかり川下に同善淵といつて、すさまじく冷たく、水の上が青く、あたかも身の毛もよだつような淵があった。七月下旬に家来に鶴を遣わせて漆戸右門が見物しているところに、たまたま小雨が降り、鶴は一円に進まず川岸に上がった。家来たちは淵の中に大木のようなものが見えると言ふ。鶴遣いたちが陸へ上がったので、

右門は怪しく思つて、陸には大きな焚火をとませ、自身も松明を持って、鶴綱を取り淵の岸へ鶴を追ひ入れたけれども、少しも進まなかつた。

そのとき生臭い風が吹いてきた。右門は不思議に思つて松明を振つて見ると、何とも知れぬ獅子の頭のようなのに両目が日月のように輝き口を開いたものが、沖の方から右門の間近にやつて来たので、左の手に松明を振り立て、二尺二寸の大脇差を抜き、首を切つたところ、口を開いてかかつてきたので、左の手に持っていた松明をその口の中に突っ込んだところ、水をはたいて淵が鳴動してそのものが見えなくなつた。そこで、右門は家来たちを連れて帰り、翌日その淵を見たけれども何事もなかつた。三里ばかり下の眼田河原というところに、長さ一〇間ばかりの大蛇が上がつた。鬚の長さ四尺、左右に六本の牙、上下に四枚牛の齒のごとく小齒あり、首半分切れ、松明の串を嚙んで死んでいた（注15）。

### 〔一三〕 大蛇が城（下伊那郡松川町）

大島村字古町に臨んだ要害の地に、高く石垣を築いてそびえる城を台城という。天竜川の水が城の櫓の下に渦巻いて、おのずと作る千尋の淵に、何時の頃よりか大蛇が住む

と言ひ伝えられ、城の名も大蛇が城と呼び習わされていた。鶴の毛ほども雲もない晴れた朝、水煙がもうろうと城の櫓に立ちこめることがある。淵の上より立ち上る水気が霧の雨となって城に降り注ぐのを見る人達は、淵の大蛇の仕業だといって、不吉の前兆でもあるように恐れていた。天正一〇年（一五八二）の春、南の国境を越えて伊那に侵入した織田信忠の軍勢は、嵐が枯葉を巻くように、行く先々の諸城を陥れ、いよいよこの大蛇が城を包囲した。数多き戦場の名譽を誇った武田菱の旗指し物も、今日は孤城の上にやがて来たるべき落城の日を待つばかりとなった。

敵が山の上より射かける火箭に、城のそこかしこから火の手が上がった。すると不思議にも淵の水が渦巻きとなって上がり、水の底から大蛇の姿が現われたと思うと、にわかに淵の水が雨となって、たちまちに城の火を消した。幾度城に火をかけても、その都度大蛇に消されてしまうので、織田勢は城を落すには淵の大蛇を殺すより外はないと、射手を揃えて隙間もなく淵を射た。しばらくすると淵の面に大波が狂い起って、天地晦暝の大雷雨、やがて雨のやんだ天竜川の水を真っ赤に染めて、射殺された大蛇は淵の底深く沈んでいった。

城は間も無く敵に焼かれて煙のうちに落城した。今でも

城跡の畑を掘り起こすと、真っ黒い焼き米が出てくるそうである。

また一説に、城兵は淵の大蛇が城にむかって吐く、水煙の不吉を忌んで、これを射殺した。不思議の守護を失った城は、間もなく敵に攻め落されたとも言っている（註16）。

#### 〔二四〕 鰐が淵（下伊那郡泰阜村）

泰阜村明島の鰐が淵には昔大きな蛇が住んでいた。その頃その村に母と娘の二人暮らしの家があって、それが年ごろの美しい娘であった。その娘の元へ夜な夜な通ってくる、見慣れぬ奇麗な男があった。日が暮れると何処ともなく忍んで来て、明け方になるとどこかへ帰っていく。娘が男に家を尋ねても、「そればかりは聞いてくれるな」と答えた。不思議に思った母親は、ある夜ひそかに糸と針を用意して男の帰りの頃をはかり、そつとその袂に針を差しておいた。その翌朝、母の手元に残る糸をたどって尋ねていくと、糸はまさしく鰐が淵の中へ引いている。それで初めて毎夜忍んでくる美しい男は、この淵の主の化身ということが知れた。

淵の中では親蛇が子蛇に諭す話し声が聞こえる。「親のいさめを破って忍び歩いた罰で、お前ももう長い生命はあ



るまい。針の毒は何よりも恐ろしい、間も無くお前は死なねばなるまい」といって嘆く。すると子蛇の声で、「たとえ自分はこのまま死んでも、自分の胤は残してあるから、そのように嘆くこともあるまい」という。

やがて娘は月満ちてお産をした。生れたのは蛇の子ばかりで、それがたらいに七杯半もあった。

この淵には梔貸しの伝説もあるという（註17）。

## 「二五」 竜の住む淵（愛知県富山村）

河内の氏神である諏訪社の社殿は、元集落の外れ、村人たちが「池の河原」と呼ぶところにあつたと伝承されている。池の河原は天竜川の河原の一部で、社殿の下には大きな淵があり、淵には諏訪明神の化身の竜が棲んでいたと伝えられた。

多田氏の初住地・曾川のお池大明神を祭った社殿の下にも、新豊根ダムによって、その地が没するまでは深い淵があり、淵には竜が棲んでいると伝えられていた（註18）。

## 「二六」 日露戦争に参加した甲賀三郎（下伊那郡南信濃村）

諏訪社の祭神は民間の伝承では、甲賀三郎と呼ぶ大蛇とされる。諏訪明神は武勇の神だったので、日露戦争には諏

訪明神の甲賀三郎が蛇体のまま幾度か従軍しているといわれた。まず諏訪湖を出て天竜川を下り、太平洋から日本海に抜け戦列に加わった。そのつど大蛇が巨体をくねらせて天竜川を荒れ下るため、沿岸の田畑は洪水による水害を幾度かこうむったという。しかし今度の太平洋戦争では、どうしたわけか明神様の出征が全く見られず、ために敗戦に終わったと遠山谷では噂されている（註19）。

## 「二七」 和仁が淵から出た観音様（飯田市時又）

竜丘村時又の長石寺にある観音様は、行基菩薩の作だといわれている。昔泥棒がそれを盗み出して、抱えて逃げようとすると、その小さなお像がにわかに重くなって動けない。お寺の方へ向くと軽くなり、その反対の方へ向くと重くなる。泥棒もさすがに恐ろしくなつたと見え、それを天竜川へ転がし込んで置いて逃げ去った。

その頃、下流にある泰阜村の明島に、某といって極めて信心深い人があつた。ある夜お観音様が夢枕に立ち、「和仁が淵の底に沈んでいるわしを救ってくれ」という。その人は不思議に思い、翌朝急いで和仁が淵へ行ってみると、水の底からちかちかと御光がさしている。

早速引きあげて見ると世にも有難い観音菩薩であつたか

ら、すぐに長石寺へお返し申した。ちょうどその時、その家では家普請が始まっていた。ところが水の中から観音様をお助け申した夜、不思議にもどこから沢山の材木が庭いっぱい運んであった。しかもそれには鳶口の跡などが一面ついていた。それは長石寺のお観音様が、御礼のために運んでくださったのであった。その家では大変に喜び、その材木を使って家を建てた。それで今でもその家の柱や梁には鳶口の跡がそのまま残っているそうである(註20)。

このように天竜川の淵は実に様々な伝説に彩られている。こうした伝説の評価については、次章で触れることにする。

# 註

- 1 『下久堅村誌』七九六頁(下久堅村誌刊行会・一九七三)
- 2 岩崎清美『伊那の伝説』一八一頁(歴史図書社・一九七九)
- 3 同右一八二頁
- 4 『下久堅村誌』八一七頁
- 5 同右七九八頁
- 6 同右一八五頁
- 7 同右二二八頁

- 8 『下条村誌』一四〇七頁(下条村誌刊行会・一九七七)
- 9 『木の下蔭』巻之下(『落原拾葉』第九輯、『落原拾葉』中巻三〇〇頁・名著出版・一九七五)
- 10 松山義雄『山国の神と人』一二六頁(未来社・一九六一)
- 11 『長野県 上伊那郡誌』第五巻民俗上一四三五頁(上伊那誌刊行会・一九八〇)
- 12 『伊那の伝説』五七頁
- 13 同右五九頁
- 14 『小平物語』第三十一(『落原拾葉』上巻一四一頁・名著出版・一九七五)、この『小平物語』は小平向右衛門が貞享三年(一六八六)、八三才の時に天文以来の一族の動静を書いたものとされる。その意味では『熊谷家伝記』にもよく似ている書物である。
- 15 同右
- 16 『伊那の伝説』一一〇頁
- 17 同右一七三頁
- 18 山崎一司『失われた祭り』一五四頁(富山村教育委員会・一九九一)
- 19 松山義雄『山国の神と人』一一三三頁
- 20 『伊那の伝説』一六一頁